

芸術の世界

経済学部
現代ビジネス学科1年

手塚航

初めましてこんにちは。私は「オルテノ博物館」の館長をしております、クンストと申します。このたびは当館に入場して頂きありがとうございます。このたびは当館に到着して頂きありがとうございます。このたびは当館に到着して頂きありがとうございます。

す。今回、お客様は当館のちょうど一万人目のお客様という事で特別に私がご案内致します。……それでは行きましょうか。全ての作品に魂がこもった、オルテノの世界へ！

とここでお客様、プノエル・オルテノという芸術家の事はご存じでしたか？ え？ ご存じありませんか……プノエル・オルテノは二十世紀の初期に活躍した芸術家で、フランス出身。彼は絵画を中心に、数多くの作品を残しています。オルテノはもともと売れない画家として活動していましたが、彼が二十五歳に出した『ヴィーナス』が表に出た事により、彼の人生は一転します。彼がフリーマーケットに『ヴィーナス』を出していた時、ある画商がその絵を買いたいと申しました。その金額五十万フラン。現在の日本円にすると五千万円もします。画商は言いました。

「君がこの絵を描いたのか？なんてすばらしい！この絵を是非買わせてほしい！ いや、買わせてください！」

オルテノは画商にこう返しました。お代はいらないからもらってくれ

「本当か！しかし私は画商を生業にしている者が金が必要ないんだったら何か願いを言ってくれ。私なんでも叶えよう」

実は彼、画商の中でもかなりの富を得た実業家で、あらゆるものをもっていました。

「そうか。では画商さん。アトリエが欲しい。それと僕の描いた絵を多くの人に見てもらえる画廊が欲しい」

「なんだそんな事でいいのか。すぐに手配しよう。この絵が手に入るなら安いものだ」

「僕は僕の作品達が貴方のように誰かを選ぶ事を望んでいる。そのためにはもつと多くの人に僕の作品を見てもらわなければ行けない。画商さんに

とってはそんな事でも、僕にとっては最高の報酬なんだよ」

そういう彼の言葉には熱意と作品への愛がこもっている、と感じた画商はオルテノにこう言いました。

「素晴らしい！君は大金なんかよりも自分の作品への愛を優先した。やはり私の目には狂いは無かった！君は作品に対するあふれんばかりの情熱と、本物の芸術家にしかない独創性とカリスマを感じる。君はこんな露店で絵を売っただけの人生は似合わない。私は君の作品の真の魅力がわかる客に売れることを約束しよう。ところで名乗るのが遅れたな。私はシャルル・アランだ。よろしく」

「プノエル・オルテノだ、よろしく。旦那のおかげで僕の作品達は良き主人を見つけ出す事が出来るだろう。期待してるぜ」

こうしてシャルル・アランの協力を得たオルテノでしたが、彼の作品を買ってくれる人はあまりいませんでした。そのことにアランは激怒しまし

55 PLUS i

た。

「名前と立場だけでかくなつた愚か者め、なぜこれほどの名画の価値がわからないのだ！」

絵画の評論家達にはオルテノの作品に1フランを出すのも惜しいと罵りました。

「仕方ない、彼らは僕の絵に選ばれなかった。それだけの事さ。特にその『楽園』なんてあいつらが一番嫌うだろうね」

「ああ『楽園』か……あれは正直私も好きではないな……しかしどうしたのだオルテノ。『ヴィーナス』以降あまり良い絵が無いぞ？ あれほどの作品はもう書けないんじゃないだろうな？」

「旦那にとつちや、『ヴィーナス』は最高の作品だろうよ。旦那にとつて最高の作品は『ヴィーナス』だ。それと同じ様に『楽園』や『激情』を最高の作品というやつが必ず現れる。そいつらはきつと旦那が『ヴィーナス』を見たときと同じ反応をするだろう。僕の作品を選んだ相手ならどんな要求だって飲むだろうよ」

そういった彼の口調は確信めいたもので、自信の表れでもありました。

シャルル・アランは最初は黙って見ていましたが、彼も商人。絵が売れない以上やっつけていけません。やがて彼はオルテノの絵が売れない事にしびれを切らし、

「オルテノ！ 私は前言撤回する！ やはりお前は売れない画家だ。お前はもう『ヴィーナス』のような名画を描けない以上、アトリエも画廊も必要ない！ 私の前から消えてくれ！」

「そうかい、わかつたぜ旦那。俺は出て行く。短い間だったが、世話になつたな。あばよ」

オルテノは荷物を整え、アランに最後に一つこんなことを言いました。

「そうそう一か月後『ヴィーナス』を受け取りに行く。あれは未完成なんぞでな」

「なんだと！ あれは完成してなかつたというのか？」

「そうだ。あれには『器』を追加しなければ完成しない。そして一か月後に『ヴィーナス』は『新たなヴィーナス』へと変わるだろう」

そういつて彼はアランの元を去りました。その一か月後、オルテノがアラン邸へ『ヴィーナス』を受け取りに行くところをシャルル・アランはいませんでした。代わりに、彼の部屋には『支配』と名付けられた一枚の絵が飾られていました。

『支配』をアラン邸から持ち帰つたオルテノは以前『楽園』をゴミだと言いつつ切つた画商、バトン・アンドレに売りつけました。

「初めまして僕はプノエル・オルテノ、芸術家だ。バトン・アンドレあなたに買って欲しい絵がある」

「なんだお前は？ アランの知人と言つたが俺に絵を売りたいだと？ つまんない絵を見せたら、お前ごと絵をライン河にブン投げてやるからな」

そう言つてたアンドレはオルテノの『支配』を見た瞬間、目の色がみるみるうちに変わりました。

「なんだこの絵は！ 素晴らしい！ 私は数々の美人画を見てきたが、ここまで美しい物は初めてだ！ オルテノ君、この絵いくらで売ってくれるんだね？」

「そうだな……アランの奴が五十万フランつて言つてたから百万フランでどうだい？」

「そんなに安くもいいのか？喜んで買わせてもらおう」

その後、アンドレがとある美術展に『支配』を出展しました。『支配』は世界中の評論家を魅了し、オルテノの名前と共に、大きな注目をあびました。その後彼は、人々を魅せる作品を排出、彼の名声はより大きな物となり、それぞれが五十カラットのダイヤモンドよりも美しく価値のある名作とまで言われました。しかし、オルテノの作品を手に入れた者達は必ず行方不明となり、オルテノの作品はいわくつきの名画と呼ばれ、悪魔の絵画や死神の絵なんて言われたりもしましたが、それでもオルテノの作品を欲しがれる者は大勢おり、時には全財産を売つても買いたいという客までいまし

た。人々を破滅へ導く魔性の絵画達。それは欲深い人間を魅了する悪魔が乗り移った物と言えるでしょう。

さて、前置きが長くなりましたが、我がオルテノ博物館の説明もしましょう。この博物館は、七年前にオルテノを支持するオルテニズムの有志によって建てられ、彼らが集めた作品達を展示しています。お客様に特におすすめるのは、オルテノの作品の中でも多くの人間を飲み込んだ『狂気』シリーズです。『狂気』はいずれも多くの人間魅了し、また多くの人間を飲み込んでいきました。その美しさをその目に焼き付けておくといいでしょう。でも、絵に深入りしすぎないでくださいね……作品達は貪欲な悪魔であり、気に入った人間を逃しません。深入りしてしまつたら最後、絵の中に連れ込み、絵の中の住人として生きる事になるでしょう……それでは案内致します。欲望と狂乱の美術、オルテノの世界へ……

オルテノの代表作、『狂気』。まずはその中で、最も多くの人間を魅了した作品を紹介しましょう。

『ヴィーナス』

オルテノがアラン邸に行った時に『支配』へと変貌していた『ヴィーナス』。さて、『ヴィーナス』はどのようにしてアランを飲み込んだのでしょうか？

ヴィーナスといえばローマ神話の愛と美を司る女神で、ミロのヴィーナスやヴィーナスの誕生など、美しく清らかな女神として描かれる事が多いのですが、オルテノの描いたヴィーナスは違いました。彼のヴィーナスは、ベッドルームを背景に、悪魔の羽を広げ、売春婦の服装で椅子に座っており、こちらを妖しい瞳で見つめている。彼女の右隣には縄と蝋燭の置かれたテーブルがあり、左隣には手錠と目隠しが置かれたテーブルがある、といった絵でした。

彼の描いたヴィーナスは美しく清らかな女神ではなく、妖しさと邪淫を象徴する淫魔だったので。オルテノをアトリエから追い出してしばらくたったある日、アランはオルテノに聞きたい事があるといい、彼を自宅に招き尋ねました。

「オルテノよ、お前はなぜこの絵に『ヴィーナス』と名付けたのだ。淫魔とヴィーナスは何もかも違うではないか」

「旦那、ヴィーナスと淫魔は何もかも違うようで、共通点がいくつもある。第一に女性であるという事。第二に裸に意味を持つという事。そして第三に男にとって理想的なフォルムをしている事だ。確かにその本質は全く違うだろう。しかし、彼女たちは女性だ。女性は時に男を振るい立たせ、栄光と繁栄を与え、それと共に破滅や墮落をもたらす事もある。

僕達男性はそんな女性と共に生き、女性に対するあらゆる感情を絵や伝説にして表現した。

僕の『ヴィーナス』もそれと同じだ。絵の名前と絵そのものを相対する別の物にしたのは女性の持つ二つの特性を二つの表現方法で表す事が出来るからだ。それが『ヴィーナス』と名付けた理由さ。そしてこの二つに共通する特徴、それは裸に意味を持つという事。女神の裸には清らかさと美しさを与え、悪魔の裸には邪淫や妖しさを与えた。これはすなわち、男にとって陰と陽の欲望を現しているのさ。女性に求めるべき欲望は女神が、求めるべきではないとされた欲望は悪魔がそれぞれ体現していったのさ。それはそれぞれが、男性の理想的なフォルムである事にも直結する。どちらも欲望の体現者であり理想である。二つは違うようさで表裏一体。それを僕は自分の作品で表現したのさ」

オルテノは楽しそうに話し、普段あまり表情を出さない彼にしては珍しく、嬉々とした表情でした。アランはこれ聞き、自分の目に狂いが無かつた事を改めて実感しました。

「素晴らしい！ 聞いていて惚れ惚れしたよ。そこまでの熱意を持って『ヴィーナス』を描いていたのか。そういった想いが籠っているからこそこ

れほどの名画が欠けるのだろうか」

「褒めてくれるのは嬉しいが、『ヴィーナス』は僕の欲望のままに描いた、いわば落書きに等しい。説明なんて後付けさ」

「落書きというなら、なんで露店に出したんだ？ 露店に出すにしても、ちゃんとした作品を出すべきだろう」

「あの日は最初『激情』を出していたんだが、いつものごとくちっとも売れなくてな。だからって値下げはしたくなかったんで、安価で『ヴィーナス』を出したら旦那の目に留まったって訳さ」

当時のオルテノは自信作『激情』ではなく『ヴィーナス』が売れた事は予想外でした。

「しかし、『激情』はとてつもないヴィーナスを超える物とは思えんな。あれは恐れを感じるぞ」

「そうだろうな。あれは革命をよく表した絵だ。あの絵は権力者を嫌うんだよ」

「それは私も感じる……やはり私は『ヴィーナス』の方が合いそうだ」

「まあ、絵は旦那を選んだ訳だしな。だが旦那、あの絵には気をつける。『ヴィーナス』は被虐の淫魔だ。彼女はまず自分を虐めると懇願してくる。それに一度でも応じてしまえばもう彼女の手のひらの中だろう。獲物を嗜虐的な快楽を覚醒させ、自分の領域に誘い込む。」

彼女の狡猾な所は、快楽の坩堝に閉じ込めたら、すぐに食わずに一時的に開放し、理性を戻す所さ。

旦那、サディズムとマゾヒズムは表裏一体なんだ。それを彼女はよく知っている。だがそれを知らない獲物は理性を放棄し、快楽に奔る。そして気づいた時には支配していたはずが支配されているの

さ。なんでそうなったのか？ そう考える理性はもう無く、どうしようもなくなるのさ。そうしたら彼女に飲み込まれ、彼女の一部分になって消えてしまっただろうな」

「そうか……気を付けよう。だが彼女は従順だぞ？ 昨日だつて私を求めてきたし、一昨日も彼女から……」

オルテノはアランの言葉を遮り、今までとは違う、憐れむような目をアランに向けました。

「旦那、最後に一言言わせてもらおう。淫魔の言葉を真に受けない方がいい。淫魔の言葉は甘い毒だ。なんて、もう手遅れの旦那に言っても仕方ないか」

その夜、アランはこの世から消え、『ヴィーナス』は『支配』へと変わりました。

「ワイトキングの凱旋」

この絵は豪華な王冠、王たる威光を示す王笏、赤に金の刺繍の入ったマントを纏った骸骨が、後ろに多くの鎧や文官の法衣を着た骸骨を従えなが

ら堂々と歩いていて、その周りを骸骨のギャラリ

が左右に壁を作り、歓声をあげるといふオルテノらしい作品です。この作品は元々『パレード』という作品でした。『パレード』は『ワイトキングの凱旋』と同じ構図でしたが、骸骨は裸のまま寂しい物でした。それに不満をもった骸骨達はこう

思いました。

「我々の王の外見は威厳が無く、力が無く、重さを感じられず、王はこれらを内に全てを持っていくのに、それを示せない。これは我々従者の身として悔しい事この上ない。どうにか出来ないものか……」

それを聞いた王の側近はある考えが閃きました。

「それなら良い手がある。外の者を王の供物として絵の中に取り込もう。奴らを王の装飾に変え、献上しよう。王という事を示せば、我々の王は至高の君主になる」

そうして彼らは一人の男を選んだ。彼はとある役所の職員で、オルテノが『傲慢』を売った金で作った画廊にたまたま寄り、『パレード』に選ばれ、八千フランで買いました。

『パレード』を買った男は買ったその日に自室の壁に絵を飾りました。

「なんていい絵だ！ 他の客は見向きもしなかったけど俺には分かる。この骸骨達はただ列を作っ

ているわけではない。彼らには真ん中の王をに対して尊敬があり、忠義がある。俺の上司とは大違いだ」

彼の上司は上にはペコペコ頭を下げ、部下につきつぐ当たる人で、彼は自分の上司に不満を感じていました。

（汝、我が王だという事がわかるのか。そなた、名をなんと言う？）

その言葉は重々しく、そして覇気のある声でした。それを聞いた男は周囲を見渡しますが、声の主はどこにも見えません。

（汝、我らの絵を見よ。そこに我はいる）

男が絵の方に向くと、そこにいたのは骸たちの王、ワイトキングでした。彼は他のどんな骸骨よりも威厳があり、力があり、重さがあった。明らかに他の骸骨とは違います。

「お、俺ですか？ おれはバクリ・アベルと申します。貴方はいったい……」

（我はワイトキング。一万の骸達を率いる骸骨の王だ）

アベルは現状を何かの夢だと思いました。だつて買ったばかりの絵の骸骨達が動きだし、中央にいる骸骨に一斉に跪いたのですから。

「は、はあ……しかしワイトキング様、いったいどのような御用で？」

（我は今、外の人間の従者が欲しくてな。後ろにも従者はたくさんいるが、皆、心はあつても肉体を持たない。それでも良いのだが、少し寂しくてな。そこで我の側近が外の人間を集めれば賑やかになるとな。それで貴様に声を掛けた次第だ）

アベルが状況を理解できないまま、ワイトキングは話を続ける。

（アベルよ、汝我のものとなれ。我に尽くし、我の一部として仕えよ。汝が必要なのだ）

それを聞いたアベルの返事は即答だった。

「喜んでお受けいたします。このバクリ・アベル、この身は骨の髄まで、この心は底の底まで貴方の物、私は貴方に忠義を尽くしましょう」

アベルは勢いで言ってしまったが、不思議と後悔は無かった。目の前にいる君主は今までのどんな人間よりも魅力的に見えた。彼は役所の職員として、自分を必要とされた事は無かった。自分よりも優秀な役員はたくさんいたし、特別自分が必要とされる事は無かった。むしろ、「お前の代わりなんていくらでもいる」なんて言われた事もある。

そんな俺を必要と言ってくれた。それにこの方はいまままでにあつたどの上司よりもカリスマがある。彼に仕える事は至上の喜びであるとさえ思えた。

（汝の意思、しかと受け取った。その忠義に我は必ず応える事を約束しよう）

そう言ってワイトキングはアベルに手を差し出す。アベルは極上の喜びを感じながらその手を取った。

その次の日、アベルの姿は無く一枚の絵が残されていました。タイトルは『ワイトキングのパレード』。列の先頭に立つ骸の王は豪華な王冠、王たる威光を示す王笏、赤に金の刺繍の入ったマントを纏っていました。それに満足したワイトキングは忠臣達にこう宣言しました。

「我忠臣達よ！ 汝達が我のためを思い、我に王としての威光を献上した事を誠に感謝する。そこで我は汝に褒美をやる。我は王たる証を得たが、汝らは裸の骸骨。我の臣下としてあまりに貧相だ。我は約束しよう。汝らには勇ましき者に鎧を、賢き者に法衣を、授ける。我の臣下として恥じぬ威厳を持ち、力を持ち、重さを持って、我らの栄光を外の者達に知らしめてやろうではないか！」

「——」

「——」

そして屍の王とその臣下は己のカリスマで多くの人間を飲み込み、一万の軍勢を従え、『ワイトキングの凱旋』を完成させました。

【楽園】

オルテノの作品は奇妙な物が多いのですが、その中でも特に奇妙な作品と言えはこの絵でしょう。

巨大なリンゴの木の下に笑顔の金色の何かが立っており、その前には、手足の生えた男性器と女性器が踊っている、というあまりに奇妙な絵で、オルテノの名が広まった後でもなかなか売れず、異端扱いされました。ある日、とある高名な聖職者がオルテノに尋ねました。

「初めまして。私はイタリアで聖職者をやっている者です。貴方がオルテノさんですか？」

「いかにも、僕がブノエル・オルテノです。以後お見知りおきを。イタリアからわざわざ来られたのは嬉しいのですが、どのようなご用件で？」

オルテノは聖職者を前に、いつにも無く丁寧語で話しました。実は彼、聖職者という人間が苦手なのです。人を快楽の坩堝に導き、快楽を説くオルテノと、人を正しい道に導き、正義を説く聖職者は正反対の存在だったからです。

「今回はある絵について伺おうと思ひまして……その絵画とは『楽園』。あの絵をはどういう経緯で描こうと思ったのですか？ 私、実は貴方のファンで、数々の作品を見てきましたが、あの作品だけは他の作品とは違う何かを感じました」

それを聞いたオルテノはほくそ笑みを聖職者に見えないように浮かべました。

「聖職者様にわたくしの絵を気に入って頂けるとは、何たる栄誉。敬虔なクリスチャンとして嬉し

い限りです。……しかし『楽園』にご興味を持たれるとは、貴方は審美眼を持つ方のようなのだ。いままでも中々理解でされませんでした。貴方はこの絵の価値がわかるようですね。お話ししましょう。あの絵を描いた理由とあの絵の意味を」

オルテノは全てを話しました。聖職者を欲望の世界に導くために。

「まず、あの絵は描いた経緯はアダムとイブが、禁断の果実を食べなかった世界はどうなっているのか、という素朴な疑問です。二人は禁断の果実を取り、無垢を失い、楽園は追放された。そして死という定めを負って、この世界を生きて行かなくてはいけなくなった。

そこで彼らは人間性を得た。そんな二人の選択は神にとって好ましい事では無かった。ならば神にとつて好ましい『楽園』とはどのような世界だったのか。それをわたくしの筆で描きたい、と思つたのです」

「オルテノさん、それがあの絵なのですか？ しかしわかりません。絵にあるのは奇妙な何かが踊っているのを何かが見て微笑んでいる構図で、楽園追放を連想できるのは禁断の果実ぐらい。貴方はあれらにどのような意味を持たせたのですか？」

そう問いかける聖職者の声は、興奮し、高揚していました。なぜなら彼はオルテニズムの一人で、

彼にと絵について対話できるのは至福だったので

す。

「説明しましょう。絵の真ん中で微笑んでいるのは神です。神はあらゆる宗教によって姿形を変える。その全てを体現する形であのような姿にしました」

神は太陽であり、光であり、人間のような姿であり、森羅万象の具現化だった。オルテナは、それらを体現したカオスの象徴として、『神と呼ばれる何か』を描きました。

「そして神の元でダンスを踊っているのは、神の望んだ人間です。神はアダムとイブを創り出し、最初に『産め、増やせ』と命じた。それに従った結果があのだんすです。無垢で人間性すらない二人はもはや人間では無い。僕は死なず、純粹な無垢で恥も無い、神に従っているだけの人間の素を人とは認めない。故に、神の命令にただ従った人間未満のとつた行動が、あのだんすなのです。これが私の作品、『楽園』の本質です」

「あの奇妙な物は神が作った人間未満の存在だという事ですか？」

「そうです。神がアダムとイブを作った時には、まだ人間では無かった。なぜなら人間を人間たらしめる物は禁断の果実に詰まっていたのですから。悪と善、知恵、知識、恥、死、武器、化粧、技術。

禁断の果実に詰まっていたのは無垢とは程遠い物だった。これらを得た人間はもう神のオリジナルでは無くなっていた。だから二人は楽園を追放された」

この男は聖書から新しい見解を導いた。そう思った聖職者はオルテノの話に更なる関心が芽生えました。

「オルテノさんの見解はとても面白いと思います。もう一つお聞きしてもよろしいでしょうか？ 貴方は何故、あの絵に『楽園』と名付けたのですか？」

「それは、あれが神の望んだ『楽園』だったからです。あの場所は人間にとつての楽園ではなく、神のための『楽園』だった。それがこの絵に楽園と名付けた理由です」

そう言つて彼が天井を指差すと、そこには『楽園』がありました。

「あれが『楽園』……神の望んだ世界……」

聖職者は無意識に絵に向かつて手を伸ばしました。すると、なんと絵の中央から手が伸びてきました。聖職者がその手を取ると、手は聖職者の手をつ掴み、絵の中へ引きずり込んでしまいました。

「ああ幸せだ……私は神の楽園に召されるのか……聖職者としてこれほど幸福なことはいくらう」

それが彼の最後の言葉でした。そして聖職者を

取り込んだ絵は姿を変えました。そこにあったのは憤怒の表情になった神が磔にされた悪魔を槍で貫いている絵でした。

「禁断の果実を食べた人間は神の元から離れ、不死と無垢を引き換えにあらゆる物を手に入れ進化しました。それは人間にとつては良き事だったがそれと同時にあるものに近づいていった。それは悪魔さ。悪事を犯し、欺き、誘惑し、墮落させ、殺し合う様子は、悪魔の持つ特性と似ている。人間は悪魔以上に悪魔なのさ。そんな奴が『楽園』に入つてくれば、神は容赦しないだろう。人間になった時点で、楽園に入る事は許されないのさ」

天井にある絵のタイトルは『楽園』ではなく『破戒』に変わっていました。

『激情』

この絵はオルテノの作品の中でも最も異端とされています。なぜなら、オルテノの作品は基本的に一枚一枚が特別で、同じ絵をいくつも描くという事はありません。ですが、この絵は違いました。彼は何枚も『激情』を描き、様々な人に売りました。議員、レジスタンス、傭兵、市民。その客層は様々でしたが、彼らの内には、権力への叛逆がありました。

この絵を買った誰もが革命家の資質を持つ者だったのです。ある者は新しい世を創るために奮

起し、ある者は囚われた家族を救うために革命を起こし、ある者は、新たな支配者になるために、国を動かした。ある者は平和を願い、市民を率いた。彼らは意思があり、勇気があり、賢さがあつた。そんな彼らを『激情』は好んで飲み込みました。

ある日、とある国で革命を起こし、新しい国を築いた勇者が、オルテノに絵の依頼をしました。

「プノエル・オルテノ殿、貴方に絵の依頼をしたい。新興国の希望を象徴となる絵を描いてもらえないだろうか。報酬なオルテノ殿の欲しいだけだそう」

「あなたは中東の勇者、ジャファル・ディランか。新しい王様の絵を描けるとは光栄だ。その依頼引き受けよう。報酬はそうだな……百フランでどうだ？」

「そんなはした金でいいのか？ これでも私は貴方を高く評価しているつもりだ。私が貴方に依頼したのも『支配』に魅せられたからだ。私はあんな絵を描ける人には革命が成功したら、その雄姿を描いてほしいとずっと思っていた。依頼を引き受けてくれたのは嬉しいが、その程度では申し訳なくなつてくる」

「俺は芸術家だ。欲しいのは金じゃない。せいぜい画廊とアトリエに家の維持費と生活費があれば十分だ。僕が望むのは、人々を魅了できる、至高の作品を描くだけだ。それ以外はどうでもいい」

「そうか、貴方がそういうならそうしよう。完成、期待して待っている」

そして依頼されてから一年、『激情』は完成しました。

「これが完成した作品、『激情』か。窓ごしに多くの民衆が見える。だがそれだけだ。オルテノ殿、貴方に依頼したのはこんな物ではない。百フランしかいらぬとはこういう事か！ 私はこんな物望んでないぞ」

そういつて彼は怒りを露わにしました。オルテノはそれが分かっていたように、ジャファルに絵の説明をしました。

「そいつはまだ未完成だ。そいつは特殊だな。他の絵は選んだ人間を魅了し、飲み込むが、こいつは違う。この絵は英雄が創り出す世界を写し出す鏡だ。ジャファルさん、その絵を正面から見ろ。そうすれば、絵は貴方の国の未来を写し出すはずさ」

オルテノの言う通り、ジャファルが絵を見ていると絵は光を放ち、姿を変えました。そこに写っていたのは、賑わう市場や、多くの船が行きかう港、たくさんのお店の育った畑とそこに生きる人々でした。

「これが私の創る未来か……そうだ、私はこれを現実にするために、皆が幸せになるようにと立ち

上がったのだ。これが私達の国……」

「貴方の国は『繁栄』するようだ。以前、別の国の指導者に別の『激情』を見せたときは、地獄絵図になってたよ。僕は政治に興味は無いがジャファルさんを応援してるよ」

ジャファルは『繁栄』となった絵を受け取り、オルテノに、祖国の繁栄を約束しました。やがて彼の国は市民たちを演説によって熱狂させ、民衆を虜にし、彼らを『繁栄』に導いていきました。

お客様、オルテノの『狂気』はいかがでしたか？ 邪淫、乱心、心酔、熱狂。オルテノが描く絵は、どれも狂気でありながら、彼らが望む世界を写し出し、その世界へと導いていきました。彼はかつてこういいました。

「人は皆、なにかしらの欲望を持っている。僕は欲望を、絵を完成させる重要な要素とした。欲望は原始の時代から現在まで、衰える事の無い、ただ一つの感情だ。その理解者たる私の絵はそれを取り込む事で進化する。衰える事の無い感情を取り込んだ絵は、衰える事の無い完成された物になるのだ」

これが我々を魅了した絵達の本質です。永遠を得た絵は完成し、別の物に姿を変えた絵が名前も変えるのは、新しい物へと変貌した証としてのものでした。

しかし、オルテノの作品の中でただ一つ、完成されて無い作品があります。オルテノの最後の作品、名は『芸術の世界』。貴方にはどのように見えますか？

貴方が望むのならば、このクンストが導いて差し上げましょう。『芸術の世界』へ！

『芸術の世界』 奨励賞 コメント

手塚 航

この作品は、クンストという案内役が読者に、ブノエル・オルテノという芸術家の絵の世界に案内するという形で進みます。

作品の構成はブノエル・オルテノという人間の説明から始まり、オルテノの作品である、『ワイトキングの凱旋』、『ウィーナス』、『生命』、『激情』の説明を順番に紹介し、最後に絵の本質を明かすという形で締めます。

ここで出てくる絵は『狂気』をテーマにしており、絵を見た人が様々な形で狂気に目覚め、絵に魅せられていく人々を取り込んで、絵は新たな狂気を纏いながら、新しい姿へと変貌していきます。

今回の作品のコンセプトは『新しい世界』で、それを作品の全体のテーマにしています。

ブノエル・オルテノの作品達が魅せる、様々な世界が絵を見て魅せられた登場人物だけでなく、この作品を読む読者にとっても『新しい世界』であって欲しいと思います、より特殊で狂気的な世界観にしています。

気に入って頂ければ幸いです。